書評

李浩著『唐代三大地域文學士族研究（增訂本）』

齋藤茂
大阪市立大學

中國における近年の唐代文學研究では、新たな理論、觀點、題材を求める傾向が強まっており、從來の問題點を取り扱う場合でも、政治的、社會的、文化的な切り口から捉え直そうとする動きが顯著である。例えば胡可先著『唐代重大歷史事件與文學研究』（浙江大學出版社、本文六三六頁、二〇〇七年十二月）は、武周革命、安史の亂、永貞革新、牛李の黨爭、甘露の變、黃巢の亂を擧げて、これらの政治的な事件がそれぞれの時期の文學に及ぼした影響を檢討したものであり、また尙永亮著『唐五代逐臣與貶謫文學研究』（武漢大學出版社、本文五六九頁、二〇〇七年九月）は、貶謫という視角から初唐・盛唐・中唐・晚唐及び五代の各時期の文學者の情況を捉え直そうとしたものである。本稿で對象とする李浩著『唐代三大地域文學士族研究』（以下『三大地域』と略稱する）も、こうした潮流の中で生まれた研究であり、文化地理學の理論を援用しつつ、士族という觀點から唐代の政治、社會、文化、文學の情況を檢證しようとしたものである。ところで李浩氏は、本書に先驅けて『唐代關中士族與文學』（文津出版社、一九九八年。增訂版、中國社會科學出版社、本文二八二頁、二〇〇三年九月。以下『關中士族』と略稱する）を刊行されている。今回編集部から書評を依賴されたのは『三大地域』の方であるが、氏の研究の展開では『關中士族』がその前驅となっているので、まずこちらを簡單に見ておきたい。

『關中士族』は、文化地理學の理論を應用して唐代の關中地域の文化、士族、文學相互の關連とそれぞれの展開を檢討したものである。そして論述に當たっては歷史的經緯

を踏まえ、かつ山東、江南など他地域との比較を視野に收めている。十章に及ぶ本論部分と三篇の附論とから成っており、本論部分は更に總論的な六章と各論と言うべき四章とに分かれている。總論に當たる各章の內容を簡單に紹介すると、第一章「關中地域と文化精神」は關中の地理的な概念を定めて、三輔もしくは三秦に相當するとし、先行研究を踏まえつつこの地域の歷史、文化に關して概觀している。第二章「關中の風土氣質と文學趣味」では關中の風氣として「雄深雅健」を尙ぶことを擧げ、それが自然地理、人文地理的要因から釀成されたことを說く。これら地域と文化を概觀する二章に續いて、唐代の關中士族について述べる四章が並ぶ。第三章「唐代の社會背景下での關中士族」では、まず士族の概念を述べ、次に唐代における關中士族の位置づけと統治集團への關與の仕方を論じ、さらに敦煌文獻に見られる氏族名の分布について檢討している。第四章「唐代の關中文學士族の勃興」では關中士族の重んじたものが經學から武力、さらに文學へと變遷したことを概觀し、次に唐代における關中士族の活動について述べ、その上で江南士族、山東士族との比較を行っている。第五章「唐代の關中文學集團の構成」は唐代の關中士族の著名な文學者たちについて、各士族每に名を擧げてその活動を述べる。これには土着の士族だけでなく、關中に移り住んだ士族をも含めている。第六章「唐代の關中士族と敎育」は、唐代では科擧制の定着にともなって官學が衰退し、替わって私學および家庭內敎育が盛んになったことを、關中士族を例として述べている。次に各論に當たる四章であるが、こちらには關中士族をめぐるトピックとも言うべき問題點が擧げられている。まず第七章「士族郡望から見た牛李の黨爭の分野」は、唐代の代表的な政治黨爭である牛李の黨爭について、それぞれの黨派に屬した人物の籍貫、出身という視點から、從來の說を檢證したものである。第八章「蘇綽の文體改革に關する新說」は、隋の蘇綽の「大誥」が古文の發展に持つ意義を再檢討したものである。第九章「柳宗元の古文思想と關中の學術資源」は、柳宗元の古文の思想的背景に、關中士族の間で受け繼がれてきた春秋學と、關中士族の風氣が有ったことを論じている。最後

の第十章「竇叔向の家族の本貫と郡望についての新たな検證」は、中唐期の竇叔向一族の籍貫について再検討したものである。附論三篇はより個別的な論點を取り上げている。其の一「『皇唐玉牒』の編者についての再検討」は、唐の皇帝の家譜である『皇唐玉牒』の編者について、從來の說を再検討したもの。其の二「范傳正、李陽冰らの碑誌に示される李白の世系について」は、李白の世系に關する從來の說を再検討したもの。そして其の三「柳宗元の配偶者と子供の考察」は、柳宗元の妻楊氏の死因と、彼の息子、娘について検討したものである。

以上のように、本書は唐代の關中士族をめぐって様々な角度から検討を加えた意欲的な研究であるが、その論述に問題點が無いわけではない。二、三指摘しておきたい。まず、第一、二章で廣く關中地域の文化的、地理的背景について述べ、この地域が古代から獨立した文化を有していたことを說いている。その手續きは正しいし、內容もほぼその通りなのだろうが、しかしその論調は關中地域の文化的優位性を說くことに傾いていて、「唐代」の「士族」という本書のテーマと直接結びつかない議論が少なくないことは氣にかかる。先秦から漢代にかけて文化的な中心地であったとしても、それが直ちに隋唐期に結びつく譯ではない。資料の不足から、魏晉から北魏にかけての情況が論じ難いことは分かるが、そうであっても限られた資料を繫ぎ合わせて一定の道筋を示すことが大切ではないか。本書のテーマを重視するなら、むしろ西魏、北周から議論を初めても良かったろう。關隴軍閥と總稱される各士族がどのように發展し、關中文化を受け繼ぐ集團として成長していったのかという點を中心に論じて欲しかった。

資料の取り上げ方、評價の仕方も一定していない憾みがある。例えば第五章では、各士族の人物を擧げるのに、用いる資料がバラバラである。史書の傳、詩文に限らず、小說の類も採用している。また、人物を文學性から評價する際にはその基準を明示すべきであるが、それが示されないばかりか、政治的評價や藝術面の活動まで對象となっている。著名な人物を様々に取り上げ、多様な評價を用いたのでは「文學群體」の內實が伴わないし、「群體」として見

る意義も曖昧になる。そもそも目に付いた人物を列擧するのではなく、韋、杜、裴などの士族が唐の各時期においてどのように活躍し、自分たち一族を守り、發展させていたのか、そしてその中で、新たな文學をどのように生み出していったのかを詳述すべきだろう。

先行研究に寄り掛かって議論されている箇所が目立ち、李氏自らが發掘した資料に基づいた獨自の論述が少ないことも指摘しなければならない。例えば第七章は、牛李双方の派閥に屬した人物について、李浩氏獨自の見解が示されるものと思ったが、そうした檢證は一切なされていない。陳寅恪、岑仲勉、傅璇琮各氏等による十一種の先行研究を擧げ、そこで牛、李それぞれの派閥に分けられた人物を整理し、取り上げられた回數の多い順に牛黨で八人、李黨で六人を選ぶという、甚だ安直な手法が採られている。誰がどちらの黨派に屬したかは、從來議論が分かれる問題點であり、その檢證を回避してしまっては論としての魅力が無い。しかも、それぞれの人物の籍貫、郡望を正史の傳などで簡單に判斷し、それで李黨は山東士族の代表、牛黨は關中士族の代表と結論づけるのだが、これでは重要な問題點を素通りしてしまっている。そもそも士族を問題にするなら、ある士族の出身であるということがその人物の處世や學問形成にどう作用したのかということを問わなければ、本質的な議論にならないだろう。集團としての士族を考える場合も、相互扶助がどのように働いたのか、どのように一族の靭帶を保っていったのかを具體的に論じてこそ意味が有る。家庭内の教育について取り上げられてはいるが、なお十分ではない。こうした手續き無しに、ただ史傳、碑誌などに據って籍貫、郡望を取り上げても、上邊だけの議論に終わってしまう。

また、原資料の扱いだけでなく、先行研究の取り上げ方にも恣意的な面があることを指摘しなければならない。例えば附論二では、范傳正、李陽冰らの碑誌に示される李白の世系について、詹鍈氏「李白家世考異」（『李白詩論叢』所收）など幾つかの說を引用し、相互に比較して論じている。李浩氏が頻用する手法だが、そのためか格別新しい見解は示されていない。しかし、それよりも問題なのは、他

の論では陳寅恪氏の説が屢々取り上げられ、利用されているのに、ここではその「李太白氏族之疑問」（『金明館叢稿初編』所收）に全く言及していないことである。陳氏の説が誤りであるなら、言及した上で論難すれば良い。默殺は研究者として正しい態度ではないし、それでは依據すべき研究となり得ない。

このように、本書は興味深い試みであるが、論述にはなお多くの問題點を殘していると言わざるを得ない。

次に本稿の對象である『三大地域』の檢討に移ろう。こちらも總論、分論、附編の三部構成を取っており、緒論と十一の章、および五篇の論から成り立っている。導入である緒論では、先行研究を紹介しつつ、文化地理學の理論を應用して關中、山東、江南の三つの地域の特質とそこに屬する士族の活動を政治、社會、文學各方面から檢證しようとする、本書の方針を説明する。總論部分は六章であり、第一章「唐代三大地域と三大文化中心」は文化地理學の理論を應用するに當たり、まず氏がアメリカの文化人類學者ウイスラー（C.Wissler）らの學説を援用して措定した「地域」「文化區域」などの概念を説明する。その上で陳寅恪氏の説を承けて、關中、山東、江南を三大地域と措定し、各地域の持つ特色について述べる。但し、ここで擧げられている資料は『史記』など漢代のものと『通典』など唐代のものが主で、三大地域の基礎となる東魏・北齊、西魏・北周、梁・陳の時期の資料はほとんど見られない。また論述も關中に比べて、山東、江南のそれは大雜把な印象を受ける。第二章「唐代三大地域の文學風貌」は、地域と文化・風俗の關係を取り上げ、音樂（秦聲、吳歌、齊謳・洛下吟という古代の概念によって三類に分かつ）と文體（古文の北方から南方への浸透のみを取り上げる）および文人の分布（先行研究の統計資料を使い、籍貫に從って地域分布を表示する）の三點から三大地域の文學の特徴を考察する。しかし音樂、文體、文人の分布が相互にどう關連し、また各地域の文學の特徴とどう結びつくのかについては十分な説明がなされていない。しかも唐以前の文獻が多く引かれていて、唐代の實態に卽した議論にもなっていない。唐代音樂など豐富

な先行研究がある分野について、それらの成果を全く反映していないことも氣になる。第三章「唐代文學士族の誕生」では、李浩氏が新たな概念として提起した「文學士族」の定義を行い、さらに清流、衣冠、四姓などの概念について檢討している。「文學士族」は氏の研究の中心概念として位置づけられているが、陳寅恪氏がすでに提起している「文化世族」などの概念とどう異なるのか、なぜ新たに提起する必要があるのかという點は、必ずしも明瞭に說明されていない。氏は科擧の科目である詩賦と結びつけて「文學」の語を使用し、關隴集團が仕進の道を武力から科擧に變化させたことと結びつけるようだが、普遍性を持つ概念としては受けとめにくい。人材登用システムが新しくなったことで、南北朝期との差異を明瞭にしようという意圖は分かるが、議論が表面的であり、「文學」の語の妥當性を含めて檢討の餘地がある。第四章「唐代文學士族の地域構成」は唐代の士族の情況を關中、胡姓、山東、江南に四分して檢討し、最後に三大地域の比較を行っている。但し、關中士族は京兆韋氏、杜氏、弘農楊氏、武功蘇氏、河東柳氏、裴氏、薛氏と個別に檢討を加え、胡姓士族についても洛陽元氏、令狐氏、扶風竇氏、太原白氏とほぼ同樣の扱いをするのに對し、山東士族では崔氏、李氏、王氏、宋氏を擧げるものの（盧氏、鄭氏は無い）極めて大雜把な扱いであり、江南士族に至っては個別の士族が擧げられていないばかりか、敍述そのものも整理されていない。さらに三大地域の比較でも、曾大興氏の『中國歷代文學家之地理分布』（湖北敎育出版社）と陳尙君氏の「唐詩人占籍考」（『唐代文學叢考』所收）の統計データを利用し、それぞれで文學者あるいは詩人として擧げられている人物の數を地域ごとに分類して並べるに止まっている。第五章「唐代文學士族の移動」では、唐代の士族の地域的な移動について、背景の事情によって科擧・仕官、戰爭からの避難、左遷・流謫の三點から檢討を加え、最後に士族の移動が文化面に與えた影響を論じている。しかし移動が實質的に持った意味は、個々の事例を丹念に檢證してそれを積み上げるのでない限り、容易に明らかになることではない。本章も先行研究のデータを使い、詩人、散文家、進士の數を各道ごとに安史

の亂の前後で比べるという手法に據っている。しかも移動については籍貫と居住地の違いを指摘するに止まっており、實質的な議論になっていない。第六章「唐代文學士族と賢能の標準」は科擧と銓選とによって士人を選拔、任用する際の基準について論じている。まず基準に關する唐代以來の議論を擧げ、それが多岐に亘っているため、主要な議論に卽した四種の基準（德行と文藝、器識と文藝、經術と文學、吏能と文學）に絞って檢討している。そして時期によって基準が變化し、理想とされる士人像も變わっていることを指摘した上で、そのように人材選拔の基準や手續きを明確にして、比較的公正な競爭を可能にしたことが科擧、銓選の制度の利點であり、結果として地域や階層による士人の差を緩和する效果を持ったと結論づけている。ただこれらの點はすでに先行研究でも議論されていることなので、唐代に行われた議論が各士族の具體的な動向とどう關わったのかという點に踏み込んで論じて欲しかった。

分論は五章から成り、第七章「『隋書』中の文化地理觀」は、文化地理學の見地から『隋書』の「文學傳」「儒林傳」「地理志」に見られる文化地理觀を檢證する。隋は南北を統一した王朝であり、『隋書』は唐初期の編纂で、唐に至る歷史や文化の流れに對する當時の考え方が窺われるから、ここに着目することは有意義である。しかし本章の議論も表層的であり、かつ先行研究に寄り掛かった論述が少なくない。第八章「陳寅恪の士族理念に對する誤讀」は陳寅恪氏の士族研究を紹介し、それが學界において誤解された面があったことを指摘する。第九章「〝關中本位政策〟から科擧制へ」も陳寅恪氏が唱えた統治階級の變遷に關する說を取り上げて檢證する。第十章「〝詩賦取士〟說の檢證」は、科擧の選拔において詩賦が重視されたという、所謂「詩賦もて士を取る」說について檢討している。第十一章「寡母が孤兒を敎育する　—唐代の士族での敎育において顯著な現象に對する考察と分析—」は、士族の家庭內での敎育に目を向け、その中で特に寡婦が孤兒を敎育する事例が多かったことに着目し、そのことを敎育學的、心理學的に分析している。

附編は個別のテーマに從った論考五篇であるが、これも

簡單に紹介する。「墓誌に見られる唐代の裴氏の婚姻關係」は、主として墓誌を使って、河東裴氏が唐代に王室や他の有力士族とどのような姻戚關係を築いたのかを具體的に整理、分析したもの。「碑誌から見た唐代の河東裴氏の移動」は、河東裴氏が唐代にどのように移住したかを、主に墓誌、碑文に記される埋葬地に着目して、考察したもの。「裴氏と佛教信仰」は、やはり河東裴氏を取り上げて、士族内での佛教信仰、特に女性の信仰の様子について檢討したもの。「唐代における杜氏の長安の住まい」は、京兆杜氏の唐代における居所を檢討したもの。そして「韋應物の家族の墓誌に關する補論」は、近年發見された韋應物の家族の墓誌銘に關して、婚姻や歸葬などの點から論じたものである。

本書も先の『關中士族』と同様の構成であるが、構成だけでなく論述の方法もほぼ同じである。併せ讀むことによって、李浩氏の研究意圖が分かりやすくなる面は有るが、率直に言って前書の内容を三大地域に衣更えして再述したような印象が殘る。しかも、資料の恣意的な扱い、實證の不足など、先に指摘した問題點の幾つかが、やはり覆い難く現れてしまっていることは甚だ殘念である。

個々の問題點については各章の紹介に付して述べたので、ここでは少し大きな點について記しておきたい。本書でも「唐代」を書名に掲げているが、その内實が甚だ不明瞭であると感じる。周知のように、三百年續いた唐王朝は時期によって様相が異なっている。南北朝以來の情況を色濃く殘す貞觀期、新興士族の臺頭が目立つ開元・天寶期、安史の亂以降華中地域が相對的に衰退し、江南地域が經濟發展を遂げたことによって、文化地理的にも大きな變化が生まれた貞元・元和期、さらに衰退と混迷の度を深める咸通以降など、社會も士族を巡る情況も、それぞれに大きく變化している。唐代を論ずる上では、どの時期を捉えての議論であるかを明確にし、かつ各時期を有機的に繫げた論述を行うことが重要であろう。本書のように漠然と大括りにするのではなく、それぞれの時期毎に檢討を加え、それを踏まえて改めて「唐代」として總括する手續きが必要である。

「三大地域」についても、東魏・北齊、西魏・北周、梁・陳という歴史的經緯を承けた地理概念であるので、隋から唐初期には當てはまっても、唐代全體を考える上では、必ずしもふさわしい概念とは言えない。文化地域も變遷するのであり、時期によって見直す必要がある。大きく三大地域に分けてもそれぞれが廣すぎるし、とくに山東、江南は一括りに論じることが難しい。一方で士族の活動に卽して見るならば、巴蜀も重要であり、福建、嶺南などの緣邊地域を含めて檢討することも必要である。したがって主要な地域の情況を個別に檢討し、その蓄積の上に立ってそれぞれの文化的特徵を考え、さらに文化の傳播のあり方、士族の活動がもたらした意義などの檢討に廣げるという手順をとるべきだと思われる。本書は「三大地域」を掲げながら、山東、江南地域の論述が關中に比べて大雜把に過ぎ、二地域に對する李氏の準備不足を露呈する結果となってしまっている。

李浩氏が兩書を通じて行おうとした、文化地理學の觀點から士族、文學を研究するという方法は、今後一層進められるべきものと思われる。しかし、時間と地理の二つの座標軸から巨視的な研究を進めるためには、個々の問題點に卽した微視的な研究の積み上げが必要である。李浩氏の試みは、むしろそのことの重要性を改めて浮き彫りにしたと言えるだろう。大きなテーマを取り扱う場合こそ、緻密な研究態度が不可缺であり、評者はその點から陳寅恪、汪籛、岑仲勉、傅璇琮各氏の研究の素晴らしさを再認識した。研究の發展のためには新しい理論の導入や、新しい視點の確立が缺かせないが、一方で實證に基づく着實な成果の積み上げを疎かにすることが有ってはなるまい。

『三大地域』については、昨年その翻譯書である『唐代〈文學士族〉の研究』（副題「關中・山東・江南の三地域に卽して」。松原朗、山田智、石村貴博譯、研文出版、本文三四九頁、二〇〇九年十一月）が刊行された。實は編集部からの依囑は、この譯書に對する書評であった。幸い原著が入手できたので、敢えてそちらを對象としたのだが、最後に譯書についても卑見を記しておきたい。

學術出版をめぐる情況は年々嚴しくなっており、とくに翻譯書は出版の機會も容易に得がたいのが實情である。そうであれば、貴重な機會を有效に使うことが譯者の務めでもあろう。どの書物を誰のために譯すのかという出發點が、極めて重要ではないかと思われる。出版に至った經緯はもとより承知していないが、『三大地域』が翻譯對象として選定される過程で、他の書物、例えば『關中士族』との比較檢討がなされたのであろうか。『三大地域』を選ぶとしても、兩書の關連の深さから見れば、少なくとも『關中士族』についての紹介・解說が有るべきではないかと思う。また讀者として誰を想定したのかもやや曖昧である。原著が入手できる狀態であり、李浩氏の文章も讀みやすいので、專門家は譯書を必要としないだろう。したがって學部の專攻生か前期博士課程の學生、そして一般の篤學の士が讀者として想定されるが、そうだとすれば、この譯書には讀者に對する配慮が十分でない面が有るように思う。

まず獨立した解說の項目が無く、冒頭の譯者序とあとがきの一部で若干記されるに止まっている點である。『三大地域』の學術的價値、それを翻譯紹介する意義について、從來の研究史および現在の學界の情況を踏まえて、もっと積極的に解說すべきではないだろうか。そうでないと、譯書の意義もまた不明瞭なものになってしまう。李浩氏の「緒論」に多くを委ねてしまっては、譯者の學識を窺うことも難しい。また原著が本論、各論、附論の三部構成であるのに、譯書は附論の部分をすべて割愛していることも問題ではないか。先に見たように、關連する問題點を取り上げた比較的短い論文五篇で構成されているのだが、著者の了解を得た處置とは言え、それをすっかり落としてしまうのでは譯書として不十分であろう。紙幅の制限があることは分かるが、それならばせめて附論各篇の內容を簡單にでも紹介しておくべきだと思う。譯者序には原著の目次が原文のみで示されるが、これでは讀者に對する說明として十分ではない。假に紙幅が限られていたとしても、それなりに方法は有ったはずである。たとえば章培恒、王水照兩氏の序文は、李浩氏には缺かすことのできないものでも、日本の讀者の立場から言えば、その紙數を使って充實した解

説を行う方が良かったであろう。また、これも紙幅に關わることかもしれないが、譯者注が無く、原著の注の直譯だけであることも殘念な點である。學術書の翻譯であるから、譯者注が有るのが本來であり、また想定される讀者にとっても、十全な理解のためには必須であろう。解説と譯注の二本の柱がしっかりしていてこそ、譯書としての價値が高まるのではないだろうか。讀者に對する配慮の上から氣になる更にもう一つの點は、原著に引用された史書や詩文の扱いである。譯書ではこれをすべて訓讀し、原文を並記するのみである。若干の語については、訓讀中に括弧付きで説明されているものの、全體の譯も解説も加えられていない。讀者のためには訓讀よりも現代語譯が望ましいのではないか。詩歌の引用も、多くは內容を問題にしたものであるから、現代語譯をした上で、必要に應じて原文を附記すれば良かったと思う。

譯出に當たって、いろいろとご苦勞されたであろうことは十分に窺える。しかし評者は、翻譯紹介にこそ確かな目が必要であり、しかも學界だけでなく、廣く社會に資するという積極的な姿勢が求められると考えるので、その意味で物足りない思いをしたことを申し添えた次第である。

（中華書局、本文三二七頁、二〇〇二年一〇月初版、二〇〇八年五月增訂再版）